

修士論文（要旨）  
2008年7月

大都市における定年退職ホワイトカラー男性の地域社会への適応プロセス

指導 杉澤 秀博 教授

国際学研究科  
老年学専攻  
20641611  
篠田 さやか

## 目 次

I.	はじめに	1
1.	研究の背景	1
2.	先行研究	1
3.	研究目的	3
II.	研究方法	4
1.	調査対象	4
2.	調査方法	5
3.	倫理上の配慮	6
III.	結果	7
1.	全体ストーリーライン	7
2.	地域社会での人間関係の難しさの体感	8
3.	人間関係問題の克服要因	9
4.	ルールを受け入れ地域に馴染む	11
5.	新たな関係性の構築	13
IV.	考察	16
1.	本研究の成果	16
2.	今後の課題	17
	引用文献	19

## I. はじめに

### 1. 研究の背景

近年多くの地方自治体において、高齢者が地域活動に参加してくれることで地域が活性化することを期待して、高齢者の地域活動参加促進のための支援策が行われている。しかし、2003年に行われた内閣府の調査によれば、60歳以上の男性で「地域活動に参加したい」と考える人は52.3%であるにも関わらず、実際に社会貢献型の活動に参加したことのある人は少ない。どうすれば参加意向を実際の活動に結びつけられるかが課題になっていると言えよう。この課題に対しては、内閣府などが様々な統計データを発表しており、実証研究レベルでも地域活動への参加、不参加に影響を与える要因に関する研究が複数行われている。しかし、そのほとんどが量的研究であり、参加者、非参加者の特性が地域で活動する際にどう影響しているのか、どの様なプロセスをたどって活動を開始、継続しているのかといった詳細な分析はされていない。

### 2. 研究目的

定年後に地域活動への参加を促すにはどのような施策が効果的であるかを、活動プログラムの作成に反映できる具体的なレベルで検討するためには、活動する人に焦点をあてて、地域と関わることによる意識や行動の変化のプロセスをきめ細かく分析することが必要であると考えられる。地域に溶け込むプロセスの中でも、本研究では特に「肩書きを捨ててゼロからスタートすることが重要である」という一般的な指摘に着目した。これは書籍や経験談などで非常に頻繁に聞かれる言葉であるが、先行研究の中で「過去にしがみつくとことは人間関係のトラブルのもとになっているが、会社時代に培った技能やノウハウは地域社会においても生かされている」という報告はあるものの、地域に入る際の肩書きの影響を見た研究がほとんどないからである。

そこで研究目的を、「定年退職後から地域活動を始め、現在も活動を継続している人を対象として、地域における人間関係形成の面から、彼らが地域社会に関わってからどのような問題に直面し、それをどうやって克服してきたのかを、過去の地位やキャリアの影響に焦点を絞って明らかにすると共に、得られた知見に基づいて自治体が主催する地域デビューや地域活動入門講座のプログラムの課題を整理する」と設定した。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

先行研究で地域に参加しにくいと考えられている属性の人に焦点をあて、対象者を東京都23区及びその近郊都市に在住している、定年退職し、退職後から地域活動を始めた、退職前の職業がホワイトカラーの男性で、現在は企業、団体等に属して就労していない人とした。また、「地域活動」とは町内会・自治会活動、ボランティア活動、NPO活動等の社会貢献的活動を団体に所属して行うことと定義し、個人としての活動や趣味のサークル及び就業は含まないものと考えた。

以上の様な条件で、NPO、市民活動グループ、シルバー人材センターに対象者の紹介を依頼して、11名の対象者に調査を行った。年齢は65～72歳、60代6名、70代5名である。

### 2. 調査方法

調査・研究の方法には、定年後の男性が地域に適応するまでのプロセスを見るという目的と先行研究の課題を踏まえ、修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いることとし、調査対象者に1時間程度の半構造化インタビューを実施した。ヒアリング項目は、活動を始めたきっかけ、地域に入ってみて驚いたり、戸惑ったりしたこと、それへの対処のプロセス、活動継続のために役立ったことなどである。

### Ⅲ. 結果

現在地域で活動している人達は、最初からすんなりと地域に溶け込んでいったわけではない。個人によって程度の差こそあれ、活動していく中で人間関係のしがらみや異なる考え方のぶつかり合いといった【地域社会での人間関係の難しさの体感】を経験している。しかし、自分の〈言動への周囲の反発〉を受けたり、〈反面教師から学ぶ〉ことで【活動をする中での気づき】を得て、また【社会人としてのアイデンティティを抛り所にする】ことによって、地域で活動を継続させ、人間関係を築いていく上で大切な地域社会での〔暗黙のルール〕を体得している。そして『皆平等』なく地域での、物事の進め方のペースに合わせ、謙虚に、よく話を聞くことで〈女性メンバーとの良好な関係をつくり、様々な人間関係に関わる問題に対処することができる様になって、【ルールを受け入れ地域に馴染む】プロセスへと進んでいる。

ここで特筆すべきなのは、これまでの社会人としての経験が、地域に溶け込む際のプラス要因となっていることである。肩書きを自分のやってきた仕事、培った能力、実績といった社会人としてのキャリアと捉えたとしたら、〈職務経験から得た対人スキル〉や〈培った職業キャリアへのプライド〉、〈役割・位置づけの自己分析力〉があることはプラスに働いている。これまでの経験を全て捨てて、ゼロからスタートするのは異なるプロセスを辿っているのである。

地域に馴染んだ結果、【新たな関係性の構築】がなされるが、その親密度合いは一様ではなく、〔距離を置いた人間関係〕〔地縁による協働隊的つきあい〕〔親密で個人的な関係性〕という3つのレベルに分かれている。

### Ⅳ. 考察

本研究において、過去のキャリアが地域社会での人間形成プロセスにおいてプラスに働いていること、地域で新たに形成される人間関係の親密さのレベルはいくつかに分かれることが明らかになった。

退職後に地域社会に溶け込み活動している男性は、これまで会社社会の中で培ってきた能力や実績を活かし、職業人としての自分の延長線上に地域人としての自分を見出している。肩書きは社会人としてのアイデンティティを形成する要素であり、経験が今に生かされていると思えるものとなっており、決してマイナスには働いていない。

親密さのレベルは、活動を継続していくことによって段階的に深まっていくものではなく、関係性のレベルを対象者自らが選択し、それ以上深めようとしていないケースも見られ、無理をしてまで地域で親しい関係を築くことを求めていることがわかった。これは同一組織内での個人差があることから、組織特性によるものではなく、個人の考え方によるものと推察される。また、一人の人でも活動グループによって関係性レベルが異なっており、場に応じて選択していることが伺える。

本研究から得られた知見に基づいて、東京都 23 区の自治体が主催する地域デビューや地域活動入門講座のプログラムを検証してみるといくつかの課題が見えてきた。まず、地域の課題を解決するためにコミュニティの一員として活躍して欲しいという行政側の都合に立ったアプローチからの講座が多く、参加者のニーズに対応する視点が欠けていること、次にプログラム内容に地域での人間関係形成に役立つものが少ないことが挙げられる。参加者にとって必要な支援は何かという視点から、一人ひとりのニーズを汲み取って、多様化するそれらのニーズに応える共に、コミュニケーション等の活動に生かせる実践的なプログラムを提供することが求められていると言えよう。

## 引用文献

- 1) 内閣府、「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」2003
- 2) 内閣府、「社会意識に関する世論調査」2007
- 3) 厚生労働省、「厚生労働白書—活力ある高齢者像と世代間の新たな関係の構築—」2003
- 4) 内閣府、「平成15年度 国民生活選好度調査」2003
- 5) 高齢社会対策の総合的な推進のための政策研究会、「高齢者の社会参画に関する政策研究報告書」2005
- 6) 木村好美、「高齢者の社会活動への参加規定因—社会活動に参加する人しない人」、年報人間科学、20-2；309-323、1999
- 7) 望月七重、李政元、包敏、「高齢者のボランティア活動（参加・継続意向）に影響を与える要因」、関西学院大学社会学部紀要、第91号；181-192、2002
- 8) 前田信彦、「高齢期における多様な働き方とアンペイド・ワークへの評価」、国立女性教育会議紀要、7；21-31、2003
- 9) 西田厚子、堀井とよみ、筒井祐子、平英美、「自治体定年退職者の退職後の生活と健康の関連に関する実証研究」、人間看護学研究、4；75-86、2006
- 10) 厚生科学研究費補助金長寿科学総合研究事業「職業からの引退前後における社会貢献活動—有償労働・無償労働・ボランティア活動の実態と心理的影響—中高年齢者の職業からの引退過程と健康、経済との関連に関する研究（総括研究報告書）」81-94、2001
- 11) 杉澤秀博、秋山弘子、「職域・地域における高齢者の社会参加の日米比較」、日本労働研究雑誌、487；20-30、2000
- 12) 岡本秀明、岡田進一、白澤正和、「高齢者の社会活動における非活動要因の分析：社会活動に対する参加意向に着目して」、社会福祉学 46(3)；48-62、2006
- 13) 斉藤ゆか、「シニアボランティア活動組織における「プロダクティブ・エイジング」の創出要因」、生活経営学研究、(40)；60-69、2006
- 14) 片桐恵子、「定年退職者の社会参加のマイクロ・マクロモデルの構築」、東京大学大学院人文社会系研究科博士学位論文、2006
- 15) 古谷野亘、西村昌記、安藤孝敏、浅川達人、堀田陽一、「都市男性高齢者の社会関係」、老年社会科学、22(1)；83-88、2004
- 16) 矢部拓也、西村昌記、浅川達人、安藤孝敏、古谷野亘、「都市男性高齢者における社会関係の形成—「知り合ったきっかけ」と「その後の経過」」、老年社会科学、24(3)；319-326、2002
- 17) 厚生科学研究費補助金長寿科学総合研究事業 「企業退職高齢者の社会的ネットワークに関する研究」1997
- 18) 厚生科学研究費補助金長寿科学総合研究事業「中高年齢者における社会参加とネットワーク、中高年齢者の職業からの引退過程と健康、経済との関連に関する研究（総括研究報告書）」、96-106、2001
- 19) 木下康仁、『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』、弘文堂、2007
- 20) 菅原育子、「中高年齢者の友人関係の社会心理的研究—豊かな友人関係の構築にむけて—」、東京大学大学院人文社会系研究科博士学位論文、2006